



世事雑感

須田 亮[†]

Miscellaneous Impressions

Akira SUDA[†]

最近の話題からいくつかとりあげる。連日平昌オリンピック・パラリンピックで大いに盛り上がっている。授賞式で国旗が掲揚されると誇らしく、共感を覚えるのは私だけではないであろう。メダリストのひたむきな姿勢と思いに胸が熱くなる。しかし、表彰台に上がる面々の表情は皆同じでない。金は嬉しい、銀は悔しい、銅はホッとするとTVの解説者が言っていたが、なるほど良く表している。そう言えば、今回は銀メダリストが何かと話題となった大会のような気がする。金メダルをとれず涙を流す者、慟然とした態度をとる者、深々と頭を下げて周囲にお詫びをする者、いずれも頂点に立つことを目指してきたが、奮闘もむなしく敗者となってしまった者たちである。メダリストを敗者と呼ぶのは大変おこがましいことであるが、目標を尋ねられて「金」と答えるか、「表彰台」あるいは悪くても「銅」と答えることはあっても、最初から「銀」を目指すとは答える者はいない。研究の世界も似通っている。何年か前の事業仕分けにおいて、さる国会議員の「2番じゃダメなんですか」の発言はあまりにも有名である。ナンバーワン、オンリーワンと謳うことはあっても、ナンバーツー、オンリーツーはないのである。2番はとかく浮かばれない。

さて、教育事情に話題を転じて一言述べる。大学院でも一般教養科目を受講しなくならなくなったことを諸兄姉はご存知であろうか。これまで大学院の科目は全てが専門科目であり研究分野そのものであったが、ここに来て修士課程のみならず博士課程においても一般教養が必修科目として開講されることになった。昨今、ダイバーシティの重要性と必要性が謳われている。社会の多様化が進む中では専門分野に留まらず、さまざまな分野の人たちと協力できる能力を育成することが重要である。自分の専門分野の見識を深めることはもちろんであるが、関連分野に精通することも必要である。光科学についてみると、物理、化学、生物に分類される基礎から、材料、エネルギー、医療、通信などの応用までさまざまな研究が繰り広げられており、好むと好まざるとに関わらず学際的・分野横断的な研究に発展していくこととなる。しかし、教育的な視点では一つの分野を極めることなくして異分野交流を図ることは早計と言わざるを得ない。ややもすると専門教育本来の目標すら見失わせる原因になりかねない。個の力が備わっていればこそ分野間の相乗効果が期待できるのであり、成果の大きさと醍醐味を味わえる。最初からプラス α を期待するのではなく、オンリーワンを目指すように意識して行きたい。

[†] 東京理科大学 理工学部物理学科 (〒278-8510 千葉県野田市山崎2641)

[†] Department of Physics, Faculty of Science and Technology, Tokyo University of Science, 2641 Yamazaki, Noda, Chiba 278-8510